

「語彙指導の改善・充実」に向けて

平成二八年一二月の中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（以下、「答申」と記載。）において、「小学校低学年の学力差の大きな背景に語彙の量と質の違いがある」と指摘されているように、語彙は、全ての教科等における資質・能力の育成や学習の基盤となる言語能力を支える重要な要素である。このため、新学習指導要領国語科（小・高）においては、「語彙を豊かにする指導」の「改善・充実」が図られることとなった。

語彙指導の到達点を示すとみられる高等学校学習指導要領解説国語編では、「語彙を豊かにする」ことについて、「〔知識及び技能〕の（１）言葉の特徴や使い方に関する事項」「語彙」に、「語感を磨き語彙を豊かにすることに関する事項」として、「語句の量を増すこと」と「語句についての理解を深めること」の二つの内容を挙げている。

語彙指導は小学校・高等学校までの全校種、国語科の全領域を通じて行われる指導であり、学習指導要領の改訂や「答申」の指摘を待つまでもなく、国語科の基礎・基本となる重要な指導の一つである。しかし、地道で継続的な指導が求められる一方、結果がすぐに

は見えにくく、何をどうすればよいか判断としないまま、語句の意味調べやドリル学習止まりになることも少なくなく、全校種を通じて低調であったといつてよい。

そこで、今回のシンポジウムでは、標記テーマを掲げて、小学校、中学校の先生方からのご発表をもとに、学習者の語彙について、どのような機会をとらえて、どのように指導を展開していくのが望ましいか参加者とともに考えたい。本稿は、その報告である。

平 北 山
瀬 村 中
正 か 典
おり お
賢 希

開催日時 令和元年二月八日一五時～一六時四〇分
場所 長崎大学総合教育研究棟三階三一番教室

司会進行 教育学部准教授 中島 貴奈
発表題目および発表者

一 「語彙指導の改善・充実」に向けて

教育学部准教授 平瀬 正賢

二 「マイ辞書」による辞書引き学習

長崎市立高城台小学校教諭 北村かおり

三 中学校での語彙指導の実際

長崎大学教育学部附属中学校教諭 山中 典希

それぞれ、小学校から高等学校までの語彙指導の実際をふまえた提案がなされた後、質問シートで質問を受け付け、パネリストが応答するという形式を取った。フロアからは、生涯教育を見通した長期的な視点から語彙指導をとらえたもの、各校種の語彙指導の実際に関するもの等、数多くの質問があり、活発な議論が交わされた。

以下、各発表要旨を掲載する。

一 「語彙指導の改善・充実」に向けて

平瀬 正賢

はじめに

これまで、語彙指導の広がりや深まりはそれなりに見られたが、学校現場との関わりから見たとき、大きな潮流になっていたとは言い難い。ここでは参加者の大半が教育学部の学生であることを考慮し、昭和から平成前半までを代表する小・中・高等学校各校種の語彙指導の実際

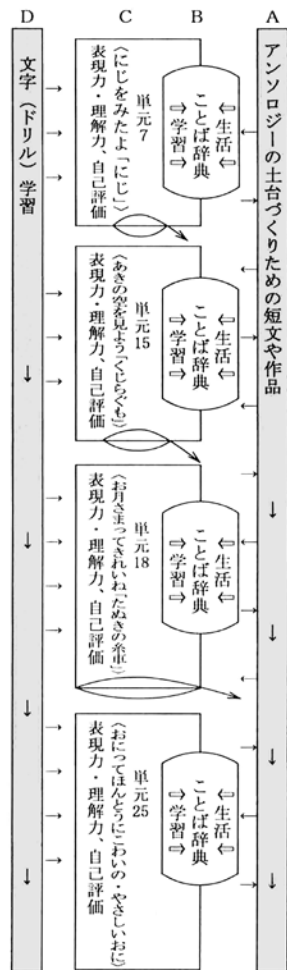
に焦点をあてて述べたい。続く発表では、平成後半を代表する語彙指導の実際についてご報告いただく。

Ⅰ 小学校における語彙指導―素水光子の場合―

素水光子は、徳島県において一九七一年（昭和四六）年四月から二〇〇一年（平成一三）年三月までの三〇年間、小学校における国語教育実践に取り組み、そのうち二〇年間は低学年、とりわけ第一学年を担当し、入門期の国語科学習指導を探究してきた実践者である。退職後の二〇〇一年（平成一三）年六月には徳島新聞社教育賞を受賞している。

「教室における学習に読書生活、言語に対する自覚（ことば自覚）、言語文化の享受と創造を絡ませていく国語科学習」を志向する素水は、次頁に掲げる「四本の柱」（素水光子『読むことの学習指導の探究』漢水社、八七頁）を立て、一年間の学習指導を構想した。素水の国語教育実践を鳴門教育大学大学院で研究した向川陽子（小学校教諭）は、その特徴を次のように整理している。

素水光子は、一人一人の児童が個性的に生きる学習指導を実現するために、長期的な見とおしのもとに、「読むこと」の学習指導を中心として、「ことばの力」（自己評価表）を位置づけた体系的・系統的な単元（C）を構想し、基本的な文字の獲得のための「ひらがな・カタカナ・漢字ドリル」（D）の活用と合わせ、主体的に国語の力を身につける学習指導をめざしている。それと並行して、「ことばじてん」（B）の作成とおして、ことばに関心をもち、自他を生かす児童の育成をめざした学習指導を展開し、同時にアンソロジーづくりによる価値ある言語



文化の享受(A)を絡ませながら、生涯にわたって言語文化と
かかわる土壌を耕そうとしている。

(向川陽子『素水光子国語教育実践の研究』平成一六年度鳴門
教育大学修士論文、二三頁)

Ⅱ 中学校における語彙指導―大村はまの場合―

大村はまは、戦後の新制中学校において、国語教育実践史上にお
いて高く評価される、単元的展開によるさまざまな学習指導法を実
践のなかから開拓してきた。

大村が中学校三年間で習得すべき語彙の体系をふまえ、学習者の
発達段階や実態を見据えた授業づくりを行っていたことはよく知ら
れている。例えば、『国語教室通信』(毎週土曜日発行)において、「こ
とばのこと」も「単元を決定するとき」の「一つの柱であ」った「あ
まり貧しいことばしか出てこないような単元、知っているようなこと

とばしか出てこないような単
元」は、「子どもたちの学習資
料としては不適切だ」(『大村は
ま国語教室第九巻 ことばの
指導の実際』筑摩書房一八頁)
と述べていることから窺え
る。

また、大村は、「ことばは、
その『場』を離れては学べない、
その場面、その文脈のなかでと
らえていかねばなりませんね。

そうでないと、知っていることは知っていてもその場面に応じて適
切に使っていくことができません。／このように考えてくると、ゆ
たかな読書生活はことばを身につける面からも大切なことがわかり
ます。」(大村はま『国語教室通信』共文社、一六二頁)とも述べて
おり、文脈のなかでことばをとらえていく必要性にも言及している。
先の素水が「ことば辞典」を生活や学習と有機的に絡ませながら学
習を展開していたことも重要な。

Ⅲ 高等学校における語彙指導―町田守弘の場合―

町田守弘は、長く実践の場に身を置いた研究者である。マンガ、
アニメーション、ゲーム等の「サブカルチャー」を「境界線上の教
材」として位置付け、教材開発の可能性を探る等、柔軟な視点から
国語教室の学びについて実践的な提案を続けている。

ここでは、高校一年生を対象とした単元「ワードハンティング」

に焦点をあてたい。先の素水と同様に、町田の教室では、国語科授業の中心となる単元と、年間を通じて行う課題とが重層的に関わりを持ちながら展開している。「ワードハンティング」は、常用漢字の演習、「コラム」を読む、読書の記録、これらと共に年間を通じて行う課題である。また、授業の後期では言語単元と関連させたり、独立した単元として扱われたりしている。町田は、「二年間の学習が終了した時点で、各自ファイルにストックされたカードを五十音順に整理して、生徒一人ひとりのオリジナルな辞書を完成させた。(中略) 国語教育はことばの教育である。身近なことばを集めるといふ具体的な活動を通して、生徒たちがさまざまなことばと出会い、みずからの言語生活を向上させるとここで紹介した単元の趣旨がある。」(町田守弘「単元『身近なことばを集める』―『ワードハンティング』の実践―」「ことばの学び手を育てる国語単元学習の新展開Ⅵ高等学校編」東洋館出版社所収、二二二―二四五頁)と述べており、生活と教室を結んだことばの学習の必要性について言及している。

おわりに

日本国語教育学会小学校部会長の今村久二は「語彙指導の機会と場」について、次の①～⑧を挙げている。

- ① 日常の多様な場面での文字・表記・語句・語彙の取り立て指導
- ② 言語事項の要素に沿った小さなまとまりの学習としての取り立て小単元指導
- ③ 情報説明文等における取り上げ指導
- ④ 物語、詩などの言語文化ジャンルに応じた取り上げ指導
- ⑤ 音声言語単元における取り上げ指導
- ⑥ 作文等、「書くこと」

の単元における取り上げ指導／⑦ 語句・語彙を核にした、総合的・探究的な語彙単元指導／⑧ 他教科・領域や総合的な学習における語彙指導(今村久二「シリーズ国語授業づくり語彙―言葉を広げる―」東洋館出版社、二二頁)

これからの語彙指導を考えるとき、読書活動の推進や言語環境の整備、今村の言う①、②の指導(教科書の言語事項の単元、辞書引き学習、ワードハンティング等)をベースに、それと③～⑥の指導とをどのように関係付け、さらに⑦、⑧の指導や日常生活とどのように有機的に結びつけていくかが重要となろう。

小学校の素水光子、中学校の大村はま、高等学校の町田守弘の実践は、いずれも日常的な語彙の指導が授業の中心となる主単元や日常生活と深く結びつけられ、生活に生きて働く力となるよう工夫されたものであったととらえることができる。

(参考文献)

- 『特集Ⅱ国語 語彙指導の改善・充実に向けて』(文部科学省「初等教育資料」二〇一九年三月号東洋館出版社、二〇一九)／日本国語教育学会「ことばの学び手を育てる国語単元学習の新展開Ⅱ小学校低学年編、Ⅲ小学校中学年編、Ⅳ小学校高学年編、Ⅴ中学校編、Ⅵ高等学校編」東洋館出版社、一九九二／素水光子『読むことの学習指導の探究』溪水社、二〇〇二／大村はま『大村はま国語教室第一巻―第一五巻』筑摩書房、一九八三／町田守弘『サブカル×国語』で読解力を育む。岩波書店、二〇一五／全国大学国語教育学会「国語科教育学研究成果と展望Ⅱ」学芸図書二〇一三／全国大学国語教育学会「国語科教育学研究成果と展望」明治図書、二〇〇二

二 「マイ辞書」による辞書引き指導

はじめに

北村 かおり

子供たちの語彙を増やすという指導の一つとして、ここ十年ほど、学校にある辞書ではなく、個人で購入して、自分が自由に使える「マイ辞書」を学校に持ってきてもらって、辞書引きをさせている。これまでに二年生以外の全部の学年で保護者に「マイ辞書」購入をお願いし、手元に辞書を持たせて指導をしてきた。

I 新学習指導要領での位置付け

第3学年及び第4学年の内容（抜粋）

〔知識及び技能〕

(2) 情報の扱い方に関する事項

イ 比較や分類の仕方、必要な語句などの書き留め方、引用の仕方や出典の示し方、辞書や事典の使い方を理解し使うこと。

辞書や事典の使い方を理解し使うことは、情報化社会において必要な情報を収集したり、語彙を豊かにしたりするために必要な「知識及び技能」である。辞書の利用については、国語辞典や漢字辞典などの使い方を理解するとともに、必要ときにはいつでも辞書が手元にあり使えるような環境をつくっておくことが重要である。

辞書や事典については、調べる学習などにおいて活用できるようにすることが求められ、国語科に限らず、他の教科等の調べる学習や日常生活の中でも積極的に利用できるようにすることが大切である。

II 紙の辞書ならではの

言葉の意味を知るだけの目的ならば、電子辞書で引く方が速く、持ち運びも便利だが、小学生には意味調べと共に、語彙を増やす道具として使いたい。

紙の辞書を使って調べることで、

- ・ 目的の言葉を探すために、いろいろな言葉を目にする機会が多くなる。

- ・ 目に入ってきた言葉に寄り道しながら、思ってもみなかった言葉との出会いがある。

- ・ 五十音が調べながら身についてくる。(五十音の順序性や行のまとまりなどの規則性にも気付くことができる。)

III 「マイ辞書」を購入していただくために

○「マイ辞書」について保護者へお知らせの時期及び方法

学年によってお知らせの時期は、四月だったり九月だったりともまちまちだが、学級通信と懇談会でお知らせとお願いをしている。

○お願いしている辞書

「小学生用」で「総ルビ」付きのもの。二千五百円前後。

子供と一緒に本屋さんで選ぶことを勧めている。

幼稚園や保育園の卒園記念でもらっていることもある。

○「辞書力バ―」作製のお願い

辞書で困るのは保管場所である。また、箱があつては、すぐに引くことができない。初めて「マイ辞書」に取り組んだ時に、

保護者が作ってくれた「辞書カバー」が秀逸で、それ以後、毎回お願いして作っていただいている。机の横にかけられ、すぐに辞書を開くことができる。自分の辞書だという愛着も湧くようだ。

○付箋の購入

小さめの付箋をお願いしている。



・・・・これまで、ほぼ100%の所持率。保護者の協力なくしてはできない。

IV 辞書に慣れ親しませるために

「一斉の辞書引き」

- ①「0セット」↓辞書のつめが見えるように両手で辞書を挟む。
- ②「よい・・・どん！」で開く。
- ③見つけたら立つ。
- ④付箋に調べた語を書いて、辞書に貼る。
- ⑤指名された子供が、意味を発表する。
- ⑥別の表現をしている辞書を発表する。

↓いろいろな辞書があることで、同じ言葉でもいろいろな表現に触れられる。

【いつでもどこでも】

・全部の教科の学習中 ・休み時間 ・暇なとき

【見えたもの調べ】

・教室にあるもの ・給食メニュー ・自分の名前の漢字 など

【グループでのクイズ大会】

- ・リーダーが、単語を言って調べさせる。
- ・リーダーが意味を読んで単語を答えさせる。
- ・反対語を答えさせる。
- ・どっちの言葉が先に出てるでしょうクイズ など

【開いて見つけた知っている言葉探し】

*低学年では、まずは、適当に開かせて、その中で知っている言葉を見つけてさせる。

V 辞書引きについて子供たちのアンケートの結果から

三、四年生で持ち上がった児童四十七名に、五年生の十一月にアンケートを実施した。

【辞書引きをして楽しかったこと】

- ・分からないことが分かったところ。 ・普段から聞いている言葉でも、意味を知った時が楽しかった。
- ・新しい言葉が発見できたこと。 ・新しい言葉と出会えたこと。
- ・意味が知れて、実用化できたこと。
- ・分かる言葉が増えたこと。
- ・自分の名前の意味が知れたこと。 ・言葉を探すこと。
- ・付箋に書いてある数字を見ているので、この数字をあげようとしていたことが楽しかった。 ・速く引く競争をしたこと。

【困ったこと】

- ・最初は仕方が全然わからなかったこと。
- ・千何ページもある中で言葉を見つけたことが難しかった。
- ・同じ読み方でも漢字が違うものがたくさんあること。
- ・難しい漢字で書いてあるものを調べること。
- ・言葉を分けて調べること。(複合語)
- ・調べたいのが載っていないかったとき。
- ・「。」「、」「」などがあるとき。

【辞書引きをして学んだこと・成長したこと】

- ・分からない言葉を放っておかず、自分から知ろうという気持ちになれたこと。
- ・言葉の意味を知り、その言葉を書けるようになったこと。
- ・言葉のよさを学んだこと。
- ・難しい言葉をよく使うようになったこと。
- ・いろんな言葉を知れて語彙力が上がったこと。
- ・人と話すときの語彙力が増したこと。
- ・一つ一つそれぞれの言葉に意味があることを学んだこと。
- ・知らない言葉を探して覚えて、それを実際に活用できたこと。

VI 成果

- ・手元に置いておくことで、辞書を引くことが苦にならなくなった。
- ・「この言葉の意味は何かな?」と思うことが増えた。
- ・いろんな場面で自分たちで調べるようになった。

・言葉そのものに対する意識が高まった。

・継続して使用することで、さらに使わせやすくなった。

Ⅶ 課題

- ・辞書引きの基礎・基本の繰り返し指導
- ・「マイ辞書」や付箋の購入、保管、管理
- ・使用学年や学校全体での使用
- ・辞書引きをして語彙力を高める手立て

おわりに

マイ辞書のおかげで、いつでも辞書が手元にあり、自分たちでどんどん調べるようになった。一年生でも、気が付くと、付箋でいっぱい辞書が机の横にかけられている。絵本も辞書も変わらない様子で開いている。とにかく、楽しそうなのである。学校で、みんなで行っていることが、より辞書を好きにさせるのだと思う。辞書を持たせることは自信をもっておすすめることができる。

しかし、「辞書を引かせたから、語彙が増えました」とは、なかなか言えない。きつと子供たちの中に言葉の蓄積はあるのだろうか、それが直接的に表れているのを見ることは難しい。今後は、引いた言葉で文を作らせるなど、使わせることを意識した指導をすることで、使える言葉をさらに身に付けさせていきたいと思う。

(本実践は、前任の長崎市立高城台小学校においてのものである。)

三 中学校での語彙指導の実際

山中 典希

はじめに

語彙指導というと、教科書では、取り立てて言葉を教えるページが、単元の間に入っている。漢字の音の違いと関連させて熟語を学ぶ、和語・漢語・外来語の書き表し方や印象の違い、使い分け、慣用句・ことわざを一気に二十ほど学ぶという具合である。このような取り立て指導も必要であるが、語彙指導というときに、単なる知識としてではなく、子どもの思考・判断・表現につながる、言葉の力に直結するようなものになりたい。そのためには、継続的に取り組むこと、時宜をとらえて行うこと、生徒主体の学びにすることが欠かせない。ここでは、これまでの取組から、三つを挙げる。

Ⅰ 「ことのは練習帳」による短作文の指導

甲斐利恵子先生の赤坂中学校における実践「言葉の小劇場」によるもので、附属中学校の授業に取り入れている。概要は次の通り。

字数 一〇〇字 五分を目標に書かせる。

お題 次の単元で読む作品の脚注にあるような、難語句等方法
①お題の言葉を提示する。

②辞書で意味を確認させる。

③お題の言葉を必ず使って、文章を書く。

④書いた文章を交流する。

一年生のはじめのうちは、なかなか五分では書けないが、だんだんと慣れてくる。

この取組のよさは、短作文にすることで、言葉の意味をとらえるとともに、その意味・用法にふさわしい具体的な場面や状況を想起するところにある。交流を通して、実際に言葉を理解できる。

そこで私は、お題にさまざまな言葉を加えてみた。たとえば、単元のテーマや作品の主題と関係の深い言葉。「成長」「青春」「故郷」等といった耳慣れている言葉であっても、抽象度が高い言葉を取り上げることで、生徒が言葉の意味を改めて問い直し、深く考え、より確かな理解につながることもあった。

また、二年生の文法「連体詞と副詞の見分け」の学習の終わりに、「連体詞と副詞をできるだけたくさん入れて書いてみよう」というお題で書かせた。国語の資料集を見ながら書いてもよいことにしたところ、普段は使わないような言葉を使っている生徒もいた。はじめは連体修飾と連用修飾が、ごちゃ混ぜになるなどの間違いも多いが、二度、三度と回を重ねると、感覚的に理解できるようになって、次第に正確になってくる。

また、付属語の学習をしたときには、「格助詞をできるだけたくさん入れて」や「助動詞をたくさん使って」というお題も出した。学習したことへの復習ができればと思つてのことであつたが、これには思わぬ効果があつた。中学生は、付属語というところ、「意味のない言葉」だと誤解していることが多い。しかし、「助詞」や「助動詞」に意識を向けて百字の文章を書いてみると、それらの言葉が、話し手の思いや考えを表すのにたいへん重要な働きをしていることに気

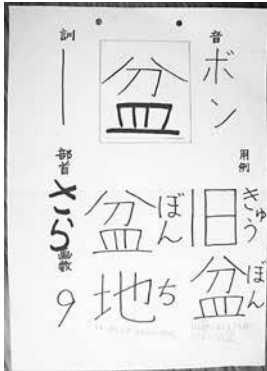
づき、驚いていた。付属語の重要性に子どもたちが気づいた瞬間であつた。この時、大学時代に学んだ時枝文法の「詞と辞」を思い出した。時枝文法でいうところの「辞」、つまり、学校文法の付属語が、話し手や書き手の主観や判断、感情等を表すのだということを私も子どもたちとともに実感し、表現するときにも、理解するときにも、付属語の一字にまで気を使わなければならないということを思った。

Ⅱ 公立中学校での「漢字発表」の取組

大村市立西大村中学校、対馬市立豆酡中学校、長崎市立三重中学校に在勤中、いずれも帯単元として実践した。

平成一二年、私が西大村中に赴任した時、既にこの取組がなされていた。年度はじめの国語部会で、とても効果のある実践なので、全校で取り組もう、となった。その説明を聞きながら、大学時代に教科教育法の授業で安河内義巳先生に教えていただいたことを思い出し、これがまさにそれだ!と思った。

安河内先生は、漢字の学習はとても大切だが、漢字練習帳に先生の決めた漢字を練習するばかりでは、子どもが漢字学習を嫌がる原因となる、と言われ、漢字カードを作る学習法を教えてくださいました。真ん中に、新出漢字を書いて、その



漢字発表用紙

周りに、読みや意味、用例、部首等を書くというものだった。西大村中の「漢字発表」はまさに、その方法を取り入れたものだった。具体的な方法を次に挙げる。

帯単元の設定の仕方 授業開始五分〜十分を使って毎時間実施する。

担当

教科書巻末の、学年配当漢字一覧表を基に、一文字ずつ

出席番号順に担当させる。

学習の流れ ① 四人の生徒が、授業が始まるまでにA3サイズの用紙(写真)に、自分の担当する漢字について調べたことを書いて、黒板にマグネットですべて貼っておく。

② 授業が始まったら、四人が出てきて、順番に説明する。筆順はみんなで手を挙げて宙に書いて確認する。(発表後、用紙は国語係が教室に掲示する。全ての教室の背面掲示板にスペースをもらっていた。)

③ 前の時間に発表された四字の漢字テストをする。漢字練習は間違つたものだけをさせる。

この学習を語彙力の面から振り返ったときに、よかったと思うのは、用例に必ず音読みのもとと訓読みのもとを入れさせたことである。語彙そのものが増えるきっかけになるとともに、和語と漢語に自然と触れることになった。和語は理解しやすい言葉が多いが、そこに関連する漢語がセットになることで、漢語の理解もしやすくなった。

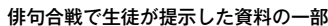
Ⅲ 俳句の学習と語彙指導（附属中学校において）

語彙指導を目標としたわけではなかったが、結果的に、語彙を増やすこと、そして、言葉のもつ印象の違いを実感し、豊かな言語感覚を養うことになる場面が多く生まれたので、ここに取り上げた。

三年生での俳句の鑑賞を、「俳句合戦」と名付けて、一人一句の対戦形式で鑑賞対決をさせた。具体的な方法を次に挙げる。

- ①教科書と資料集にある俳句から好きな句を選ばせて、対戦表をつくる。対戦は、季節ごとに行う。
- ②各自が選んだ句について分析を行い、そのよさを紹介する。
- ③一番よかった句を聞き手の生徒が判定する。

俳句は、わずかに十七音の文学であるので、選び抜かれた言葉が用いられていると言える。生徒たちは、生活の中ではあまり触れてこなかったような言葉に、敏感に反応した。季語の中には現代っ子が見たこともないものも多い。たとえば春の「桜貝」。透明感のあるピンクの花びらのような桜貝。言葉を聞くのも初めてなら、見るのも初めて。秋の「行水」も現代社会では聞かなくなつた。「燕婦る」は、燕が渡り鳥ということや渡りの季節がいつかが分かっているな



以下のような発言が出てきた。また、石田波郷の「噴水のしゅけり四よにも風の街」の句では、なぜ「よもに」なのかという疑問が出た。大人はここで、音数を合わせたかっただけだろうと思ってしまうが、子どもはそれだけでは納得しない。「しほう」と「よも」では何が違うのか、と議論が始まる。その中で、「しほう」は長音が入っている間に延びる、これでは噴水の勢いが伝わらない。「よも」は短いし、母音もオ段で揃っているからスピード感がある」などの気づきが出てきて、学級での納得解となった。

このように、「俳句合戦」は、生徒たちにとって、美しい日本語

に触れるよい機会になった。日本語の響きや語感、仮名や漢字の印象の違いなども含めて、日本語の語彙について考えることができた。

おわりに これからの語彙指導

新学習指導要領においては、資質・能力の三つの柱「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性」に沿って内容が整理された。また、「言葉による見方、考え方」を働かせて思考・判断・表現することができると生徒の育成が求められている。さらに、学びを自分の人生や社会に生かす力、そのような人間性の涵養が大切だとされており、語彙力は、これらの基盤となる。

生きて働く知識・技能の習得とは、思考力・判断力・表現力のみならず、知的活動・感性・情緒・コミュニケーション力など、あらゆる資質能力を支えるものであるべきである。

もう十数年前になるが、文科省から「これからの時代に求められる国語力」が出された。その中でも同様に、国語の知識・教養・価値観・感性等が、言語活動を支えるものとされていた。

私たちは、言葉で、考え、判断し、表現する。言語感覚を磨き、適切な言葉を選び取ることができる子ども、選び取ろうとする子どもを育成することは、豊かなコミュニケーションや言語生活につながり、ひいては、子どもの自己実現や平和な社会の実現につながることだと考える。今後も、更に工夫を重ね、実践を続けていきたい。

(長崎大学教育学部准教授 ひらせ まさたけ)

(長崎市立上長崎小学校教諭 きたむら かおり)

(長崎大学教育学部附属中学校教諭 やまなか ふみき)